令和６年１月２０日

史跡両宮山古墳墳丘裾保存整備工事　現場見学会資料

赤磐市教育委員会

はじめに

赤磐市教育委員会では、国史跡両宮山古墳の保存整備活用のため、平成２９年度から墳丘裾の保存整備工事を実施しています。両宮山古墳は、整美な前方後円形の墳丘と水をたたえた内濠によって広く知られています。しかしながら、長年にわたる内濠の波浪により墳丘裾が浸食され、崖状の崩落が進行しています。

このため、墳丘保護対策の工法等を検討することを目的に、平成２５から２７年度まで３次にわたる発掘調査を実施しました（合計２１本のトレンチ）。調査によって、墳端および内濠の堆積状況等の情報や第１段目を中心に墳丘構築法について明らかとなりました。その内容は巨大古墳の構造を解明する手がかりの一端となりました。調査成果をもとにした整備工事は継続中ですが、その内容についてご報告します。

本事業に際してご協力をいただいた関係者及び地元の方々には心よりお礼申し上げます。

両宮山古墳とは

両宮山古墳は、今から１５００年以上前の古墳時代中期後半（５世紀後半）に築造された墳丘長２０６ｍの前方後円墳です（水面より上の規模は１９４ｍ）。その規模は、岡山県内で３番目で、吉備の三大古墳の一つとして知られています。平成３０年５月に認定された日本遺産“「桃太郎伝説」の生まれたまち おかやま～古代吉備の遺産が誘う鬼退治の物語～”の構成文化財の一つになっています。内濠の外側には中堤、さらにその外側には外濠がめぐる巨大な墓域を有しており、畿内の大王墓に準じた構造をとっています。後円部北側には陪塚と考えられる和田茶臼山古墳を伴っています。

葺石・埴輪などの外表施設はなかったと考えられています。

墳丘裾保存整備の経緯について

外濠は現在水田の地下に埋没していますが、内濠は農業用ため池（両宮池）として満々と水をたたえ、この古墳独特の景観を生み出しています。一方でこの水濠は墳丘裾を崩落させ、その浸食は徐々に進んでいます。本来の中堤は現在より１ｍ以上低く、後世に追加され、ため池水位が上昇したことで、墳丘の浸食もまた進行しました。このような墳丘裾

の崩落・浸食という現象は、水濠をもつ畿内の大古墳でも同様に発生していることです。その多くが宮内庁の管理する天皇陵であり、同庁における墳丘裾護岸の実績と歴史はよく知られています。

両宮山古墳の内濠の水を抜くと、その汀線（ていせん）は長年の波浪によりえぐれを生じています（図４）。また、水面近くに生える樹木が未管理のため、墳丘裾の崩落に拍車をかけています。

工事直前の平成２９年１２月に行った墳丘のレーザ計測でも明瞭となりましたが、墳丘裾は等高線が詰んで崖状を呈しており、本来の１段目斜面が大きく削り取られ（流出し）ていることがわかります。なお、両宮山古墳は三段築成で構築されています（図１）。

水濠の中の墳端

水濠をもつ古墳の墳端は、通常水面下にあり、その判定は困難です。そのため、一般的な墳丘規模は水面より上の規模を言うことが多いです。葺石があれば基底石の位置が墳端となりますが、両宮山古墳では傾斜変換点が手がかりになります。前方部前端では傾斜変換点を確認しましたが、残存する第１段斜面は近世以降の堆積土に覆われており、ため池という性格上、浚渫（しゅんせつ）等により削平を受けている可能性があります。

墳丘裾保存整備の工法（図５）

遺跡の整備は基本的に掘削を行いません。遺構のうえに置くことで遺構を保存し、将来においても元の姿に戻せるようにします。墳丘裾の崩落・浸食防止のため、水面となる場所にフトンかごを置くことにしました。本来ならば古墳に葺石がないため誤解を与えかねませんが、水から墳丘を護るには石材が一番有効ということで、石材を用いた護岸としました。フトンかごは通常直方体で２段積むと段差ができるのですが、異形フトンかごを用いて段差がつかないように配慮しました。フトンかごを設置するための捨石（すていし）端部が本来の墳丘の推定復元ラインに近くなるようにしました。

墳丘裾保存整備工事は、今後も継続します。地元の方々をはじめ関係者にはご迷惑をおかけしますが、どうぞご協力よろしくお願いします。

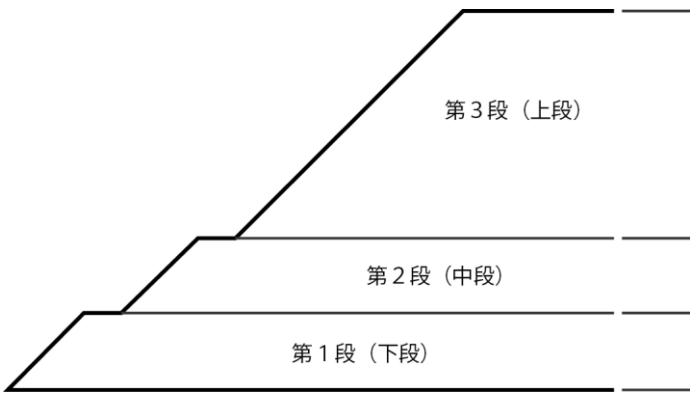

図１　墳丘断面　模式図

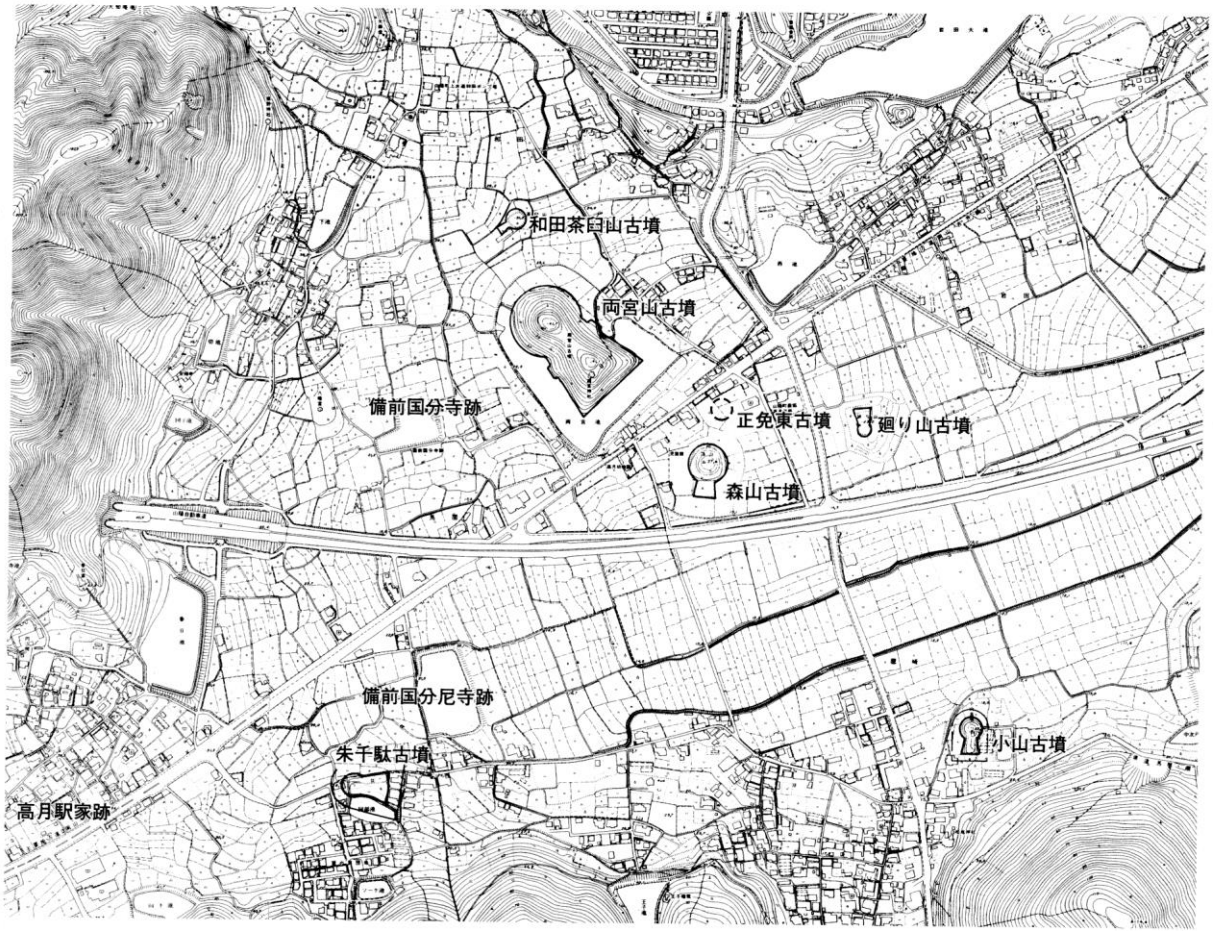

図２　両宮山古墳の周辺

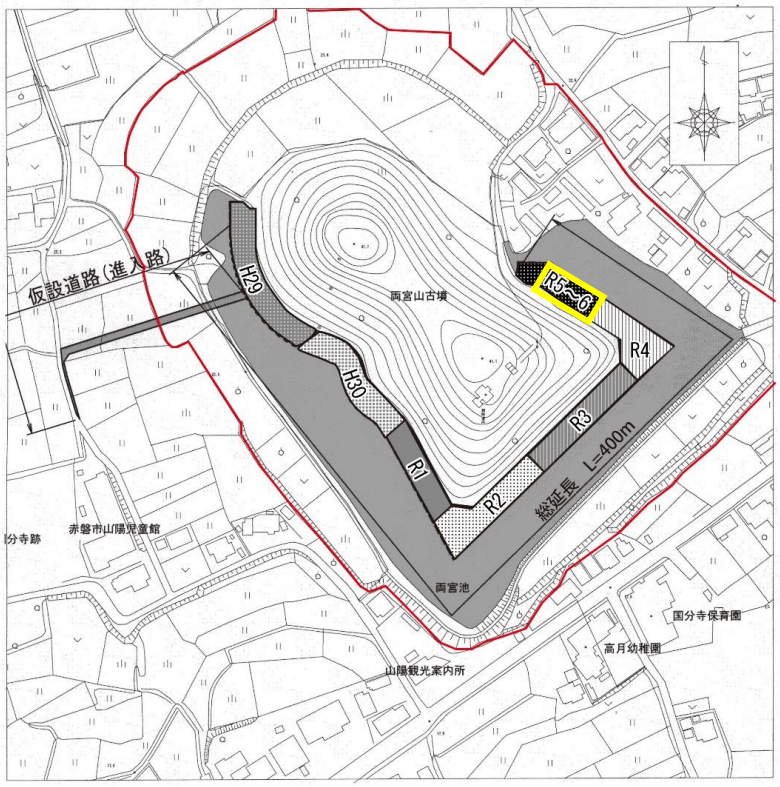

図３　工事施工範囲

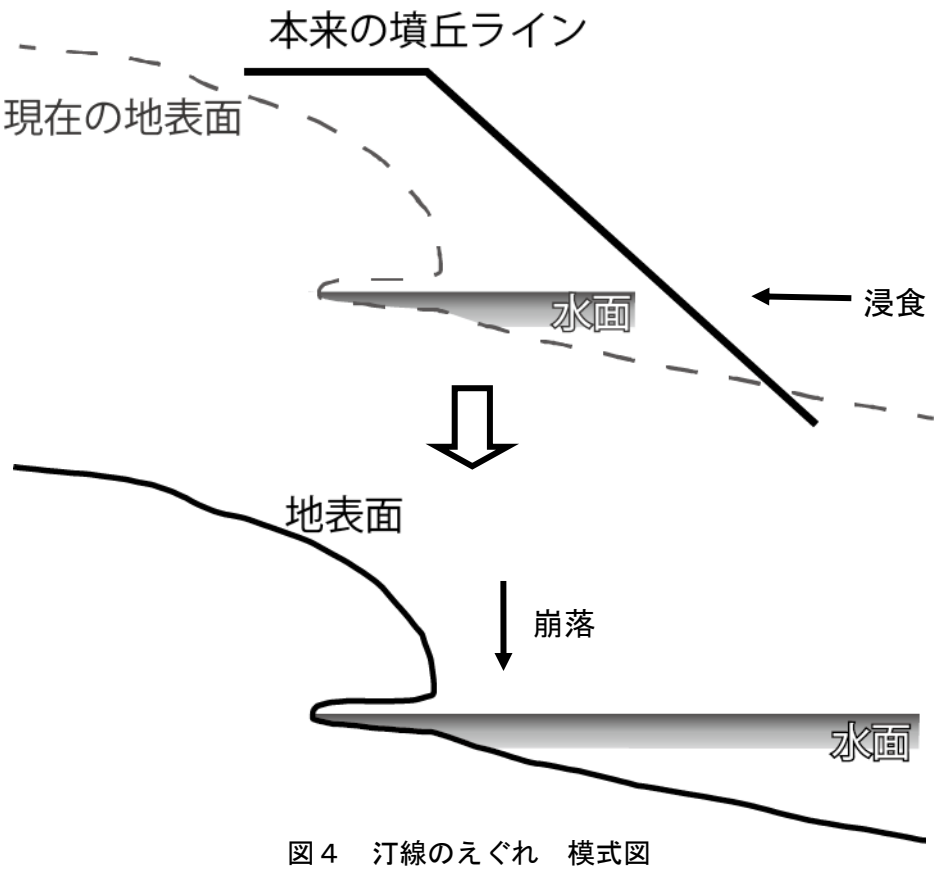

図４　汀線のえぐれ　模式図

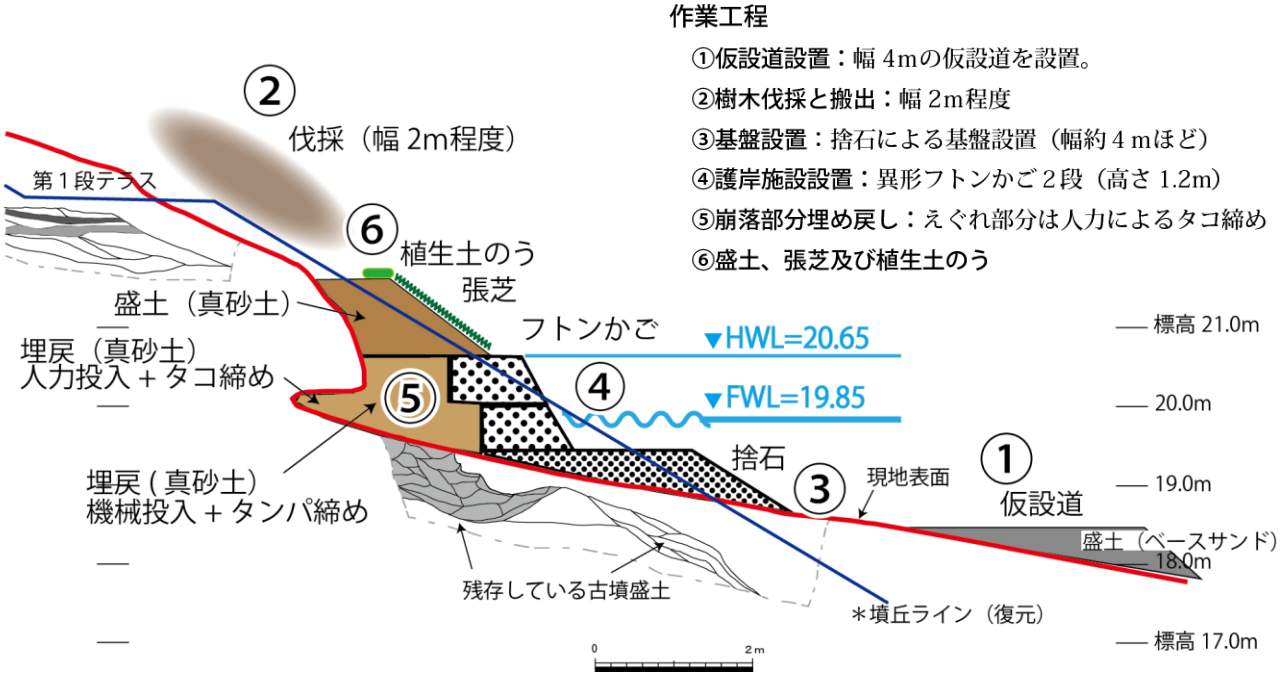

図５　工事標準断面　模式図

＊本資料の引用・転載はお控えください。

発行：赤磐市教育委員会社会教育課
赤磐市下市 337